密林の奇談

密林の奇談

南洋一郎

大陸書房

密林の奇談

昭和四十三年七月二十九日　初版発行
昭和四十七年六月二十九日　四版発行
定価　五八〇円

著者　南　洋一郎
発行者　竹下一郎
発行所　株式会社　大陸書房
東京都千代田区富士見一―十一
〒一〇二　フジミビル
電話代表（二六三）三五六一番
振替口座　東京　五六六一二番

印刷　㈱荘司印刷
カバー印刷　㈱太陽印刷
製本　㈱自成堂

乱丁・落丁のものは本社またはお買求めの書店にてお取替え致します。

目次

穴熊に育てられたカナダ少年 5
―傷ついた灰色の雌熊と暮した野性のハリ―

アッサム峡谷に眠る〝象の墓場〟 16
―ある狩猟家のノートから世紀の謎をとく―

カラハリ砂漠の蟻地獄 27
―死体を白蟻に食わせるブッシュマンの風葬―

大アマゾンの〝発狂樹〟 38
―人類学者を錯乱させた奇怪な植物の芳香―

ケニヤの人喰いライオン 49
―ウガンダ鉄道に吼えるシャイタン―

酔いどれチンパンの哀愁 59
―ビクトリア湖畔をさまようサハリ帽―

ゴダムリに現われた狼少女
—インド狼に育てられたカマラとアマラ—　69
大西洋を漂う猛獣船
—西アフリカの孤島で野獣と死闘—　80
インドの密林に眠る死都
—消えたバラモン僧と廃墟の白豹—　91
巨象とピグミーの決闘
—アフリカの密林に生きる小さな狩人—　101
原始牛セイラダーン
—マライの怪獣と恐怖の一夜—　112
コモド島の女流探検家
—コモド竜を追う英貴族夫人—　123
猛虎とチーターの死闘
—インド最後の大虎狩りのロマン—　134
ライオンの驚くべき心臓
—心臓を貫通してもなお猛るシンバ—　145

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

毒草〝悪魔(ラディクス・ペディス・ディアボリ)の足の根〟 156
—人間を狂死させる不可解な植物—
酔いどれの〝森(オラン・ウータン)の人〟 166
—人知に敗れたジャングルの野獣たち—
珊瑚蛇の猛毒〝死神の針〟 176
—噛まれた指を撃ち抜いたメキシコ牧童—
槍とライオンの闘い 188
—アフリカ、ナンディ族のフェア・プレー—
ボルネオの樹上の有尾人 200
—学界永年の謎はついに解かれた?—
野性にもどったジンゴ 213
—ボルネオ原住民と豹との愛憎劇—
タクラマカン砂漠の幻の古塔 225
—古代仏教の黄金像を争う遊牧民—
雲豹のテレパシー(遠隔感応) 237
—世にも不思議な探検家夫妻の悲劇—

大氷洞に吼えるマンモス
—氷河時代の巨象がいまも生きている?—　248
ジャワ椰子園の人喰い鰐
—クロコダイルの腹中から人骨と腕輪が……—　259
雪に残された二本脚の跡
—〝失われた環〟人獣を求めて—　270
アッサムの魔貌チタ・ガブラ
—狡知にたけた豹との死闘—　282
ボルネオの鮮血のトリック
—アラーの神より強い白人の魔力—　292

穴熊に育てられたカナダ少年

―傷ついた灰色の雌熊と暮した野性のハリー―

カナダの農園主ハリー・サービスは、野生動物保護に全力をあげている。というのも、幼時に穴熊に育てられるという数奇な運命の持ち主だったからである。

魔よけの首飾り

カナダのマニドバ州の大草原で、猟師のジャック・ヒュウは、不思議なものを見た。

はるかむこうの丘の上で二頭の小動物が、犬のように走ったり、取っ組みあったり、噛みあったり、上になり、下になってふざけていた。

一頭は銀灰色で頭が黒く背中に白いたてすじがあって、遠目にもたしかにバジャア（アメリカ穴熊）だとわかった。こいつは右前脚がびっこだったが、もう一頭はへんてこなやつだった。体形も動作もバジャアそっくりだが、白色で頭もうすきいろい。

「こいつは珍しい変り種だ。毛皮がすばらしい値になるぞ」

と、思ったジャックは、こっそりと馬をすすめた。

二頭は馬のにおいをかぎつけたらしく、あわてて穴の中へ逃げこんでしまった。ジャックは丘

へ登っていった。そこに穴熊の巣の入口の穴があった。首をつっこんだが、肩がつかえた。まっくらな奥で甲高いうなり声と、ガリガリ土をかきむしる音がした。穴に近づく外敵を威嚇する穴熊の習性なのだ。

ジャックは山刀で穴をけずりひろげ、土を外へかきだしながらもぐりこんだ。うなり声をたよりに、手探りで一頭の前脚をつかんだ。そして、はっとした。そいつの脚には毛がないのだった。つるつるしてかたい。筋肉がコチコチに発達している。そして氷のようにつめたい。白骨をつかんだような気持ちだ。

なんともいえない気味悪さに、思わず手をはなしかけると、ガブリと手の甲に噛みつかれた。そいつは、噛みつくがはやいか、頭をはげしく左右にふって、ウ、ウーッと、ものすごくうなった。

ジャックは力いっぱいそいつをつきのけて、穴の外へ逃げだした。手の甲の皮がべろっとはがれて、血がぼたぼた流れた。

「よほどの変り種にちがいねえ、白っ子というやつかな。おまけに脚があかむけだ。毛がごくすくねえやつらしい。こいつを生捕ったら大金もうけになるぞ」

こんどは用心して、獲物入れのズック袋に両手をいれて、相手の両前脚をつかんだ。相手は暴ばれくるい、噛みつき、うなりさけんでは抵抗したが、むりやりに穴の外へひきずりだすと、歯

を噛みならし、白い泡をふいて、かみつき、ひっかき、死物狂いに逃がれようとする。そいつをどうやら押えつけたジャックは、

「やっ、これは人間の子供だ」

と、さけんだ。どろだらけ、あかだらけ、もじゃもじゃ頭に目をひからせ、歯を噛みならしうなっているが、たしかに人間の子だ。しかも、その首には銀の鎖がまきつけてあるのだった。

その鎖を手にとったジャックが顔色をかえ、

「やっ、おめえはハリー坊じゃねえか」

と、びっくり仰天した。

鎖の首輪には灰色熊の大牙がとりつけてあった。四年ほどまえ、ジャックは巨大な灰色熊を射とめた。灰色熊の牙は子供の魔よけになるというので、ハリーの父のサービスという農場主が買いとって、ハリーの首飾りをつくらせた。そのとき、ハリーは三歳だった。

翌年の夏の日に、ハリーは大草原で雷鳥を追いかけているうちに大雷雨にあい、行方不明になってしまった。

両親のサービス夫妻は半狂乱になった。が、ついに死体も発見できなかった。そのハリーが発見されたのだ。

だが、まったく野獣化したハリーだった。うなり、ひっかき、死に物ぐるいに逃がれようと暴

れるのを獲物袋へ押しこんで馬へとびのると、そこへ穴熊がとびだして、馬におどりかかった。そいつを革むちでひっぱたいたジャックは馬をとばして逃げた。

穴熊は悲痛なうなり声をあげて、どこまでもと追いかけたが、馬のスピードにはかなわず、ついにあきらめて、じいっと見送っていた。

どうして穴熊がハリーといっしょに住んでいたのか、そのときはジャックには、見当もつかなかった。

が、ずっとのちにハリーが人間の言葉が話せるようになって、だいたいのことはわかった。それは……

子を失った母熊

ハリーは、大雷雨の中をさまよい歩くうちに、穴をみつけた。四歳のかれが、やっともぐりこめる穴だったが、雨やどりのつもりでもぐりこんでいると夕方になり、つかれて眠ってしまった。

目をさますと、穴熊がかれの顔をみつめていた。その右前脚の指がちぎれて、血がふきだしていた。

ハリーは元気のいい子だったので、「出ていけっ」と叱りつけた、穴熊は悲しそうにのどで鳴きながら、でていった。ハリーはまた眠ってしまった。

翌朝、目をさますと穴熊が雷鳥を一羽くわえてきた。羽をむしって肉も骨もやわらかく噛みく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だいてあった。それを「食べなさい」というようにハリーの前へおき、じいっと顔をながめていた。その目がとてもやさしく、また悲しそうだった（とハリーは思いだしていった）。

ハリーはひどく空腹だったので骨まで食べた。穴熊はうれしそうになながめていた。その日から穴熊はハリーのそばで眠るようになった。その体温でハリーは気持ちよく眠れた。

穴熊は毎日、食物をはこんできた。雷鳥の卵、果物、ときにはパンの食いかけもあった。（これは大草原をゆく旅人の食べのこしだったろう、とハリーの話を聞いて父がいった）。

一見温和な熊の親子だが

だが、ときにはハリーが見ても胸がわるくなるものを持ってくることもあった。野ネズミやリスやトカゲの死骸だった。ハリーが怒って「あっちへやっちまえ」と叱りつけると、穴熊はなぜだろうというように首をかしげ、だまって外へくわえだしてじいっと考えているのだった。

そして横になり、ふくらんだ乳房をみせて「これをおのみ」というようすをするのだった。

だが、ハリーも穴熊の乳は飲む気になれなかった。

すると、穴熊はとても寂しそうな顔をした。
「そう、じゃあ、その穴熊はメスだったのね」
ハリーの話を聞いた母はそういって、
「それは母熊だったのよ。それが、赤ちゃんを失したのよ。だから、赤ちゃんのかわりにお前をかわいがってくれたのよ」
母はそういって涙ぐんだ。
その母の言葉はあたっていた。というのは、のちにジャックとハリーの父が穴熊の巣を調べにいったところ、穴の奥に三びきの子熊の白骨がかさなりあっていたのだ。
それには、もう一つの証拠があった。ハリーが行方不明になる五日まえに、猟師のグローガンという男がトラバサミをしかけ三日目に見まわったところ、穴熊の右前脚の指三本が根元からくいちぎられて、ハサミに残っていた。
つまり、穴熊が指先をはさまれ、逃がれようと三日間、必死にもがいたが逃げられず、ついに指をじぶんでかみ切って逃げたのにちがいなかった。というのは、その指がまだ生まなましく、血も新しくてかわいていないので、その朝、噛み切ったことがわかったのだ。
母熊は三びきの子熊のことが心配で、じぶんで指をかみきって穴へもどったのだが、おそかった。

三日のあいだに三びきは飢えと寂しさにたえかねてヒーヒーなきながら、かさなりあって死んでしまったあとだった。

以上は想像だが、真実にちかいと見てさしつかえなさそうである。

子を失った悲しみの母熊がハリーを養ったのであろう。

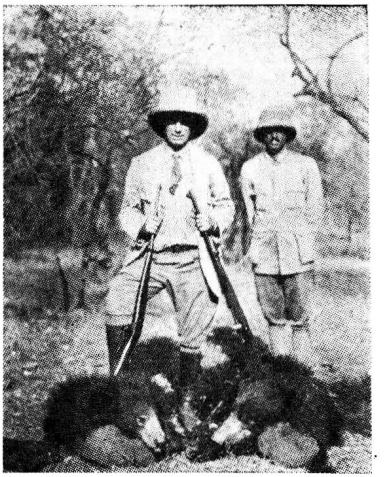
このことは人々の胸をうった。ことにウイニペッグ市の大司教マジソン師はひどく感動して『母の愛と神の摂理』と題した説教のなかで、この母熊のことにふれ、信者、とくに女性の涙をさそった（この文は同司教および同市の医師シンプソン博士の談話記録をもとにしたものである）。

人間界へもどったハリー

さて、ハリーは、母熊と同棲している間に、心身ともに大きな変化を生じた。食物も穴熊とおなじになった。五官がきわめて鋭敏になり、とくに聴覚と嗅覚が鋭くなった。直立して歩くことを忘れて四つんばいになった。それも穴熊同様に速く歩けた。言葉を忘れ、穴熊のほえ声とうなり声をおぼえた。人間の感情を失ない、人間をおそれにくむ野獣の心理が生じた。ハリーの父が、ジャックの袋からハリーをとりだそうとすると、かれは両眼をギラギラさせ、ギャッ、ギャッとさけんで両手のとんがり爪で、父親の顔をかきむしった。〝山猫〟そっくりだった。

両親は声をあげて泣いた。が三日間、部屋へとじこめておくと空腹にたえかねて、はじめて母がさしだすパンにかぶりついた。そのとき、かれの目にかすかに人間らしい光がうかんだ。

それに力をえた母は思いきってハリーを抱いてみた。すると、しばらく身もだえして逃げだそうと、うなっていたが、母の膝のあたたかみが体につたわると、ふっと静かになりじいっと考えるようなようすをした。そして、なにか、遠いものを思いだそうとするような目つきをしはじめた。



カナダ地方の熊

だが、頭の中がもやもやしているらしく、ひどくいらだって、歯をむきだし、ウ、ウッとうなって母の顔をひっかきかけた。そのとき、台所の柱時計がボーン、ボーンと鳴りだした。

ハリーはびくっとして、一心に聞きいった。ずっと前に聞いた古時計の音の記憶が、かすかに心のかたすみでよみがえったらしかった。かれの目にうっすらと涙がうかんできた。

それに気がついた母は、ここぞとばかり、一生けんめい、あたたかい慈愛の心をこめて、

「ハリー……ハリー……」

と、つづけざまに呼んだ。

母に抱かれたまま、ハリーはじいっと耳をすましていた。その体を母はぎゅうと抱きしめ、耳

に口をよせて、名を呼びつづけた。

泥のようにごって、くらい野獣の心の中へ、母の声と古時計の音がしだいにしみこんだ。ちょうど、くらやみへひとすじの微光がさしこみ、それがしだいに大きくひろがっていくようだった。

かれの目から野獣の表情が、しだいに消えた。やさしい母の呼び声とおもおもしい古時計の音が、かれの人間の心をよびさました。とつぜん、かれの両眼から涙があふれだした。かれは、

「ママ……ママ……」

と、さけんだ。

人間が生まれて、最初におぼえる「ママ」という言葉をハリーは、ふたたび声にだした。かれの心に人間がよみがえった。かれはようやく人間世界へもどった。野獣から母の子にたちかえったのだった。

母と子はしっかりと抱きあって声をあげて泣いた（このことも司教の説教に入れられた）。

哀れ、射殺された母熊

父も、うれし涙にくれていた。そのとき、戸口をガリガリひっかく音がした。父が戸口を開くと、穴熊がしょんぼり立っていた。

ハリーが奇妙なさけび声をあげて穴熊にしがみついた。穴熊はのどを鳴らしながら、ハリーのほおをべろべろとなめた。

父母はすぐにハリーを養ってくれた母熊だとわかった。そしてひどく感動した。

トラバサミにかかったり、馬で追われたり射撃されたり、人間のおそろしさはよく知っている穴熊だった。けれども、ハリーにたいする愛情はこわさを忘れさせた。

母熊はハリーのにおいをかぎながら、この家まで、はるばるたずねてきたのだった。

「まあ、かわいそうに」

母親の本能で母熊の気持がよくわかった。ハリーの母は母熊を家へ入れてやった。その日から母熊は毎日、たずねてきた。

ハリーの生活は不思議だった。父母や隣人とは人間の生活をし熱心に言葉をおぼえたが、母熊がくるとがらりと変わった。

母熊とおなじ四つ脚ではいまわり、穴熊の言葉でうなり、さけび、ほえた。母熊とつれだって草原を走って雷鳥をとらえたり、卵をさがしたり、ときには野ネズミやリスをとらえて、これは母熊に食べさせ、じぶんは蜂蜜や木の実をさがして食べるのだった。

しまいには母熊がとまりこむ夜もあった。そのとき、母がこっそりハリーの寝室へいってみると、ハリーは母熊のふくふくした毛むくじゃらの胸に小さな頭をおしつけて、さも気持ちよさそうに眠っているのだった。

それを見ると、母はすこしねたましい気にもなった。が、母熊が指のない前脚でしっかりハリー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com